

藤枝市史だより

第24号

平成23年3月31日発行
編集 藤枝市文化財課
発行 文化財・市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500 郷土博物館2F
☎054-645-1184

E-mail
muse@city.fujieda.shizuoka.jp

「駿州田中城図」に描かれた御殿

本丸部分の建

物はほとんどが
入母屋造りで、妻

(屋根の側面)の部分に枅目のようなものが描かれています。これは京都二条城二の丸御殿(江戸時代初期の建築)の遠侍などにも見られる、木連格子という妻飾りだと思われます。

二の丸のほうは、玄関(車寄)らしい部分の屋根が丸みを帯びており、少し奥には白壁に半円ないし三角形の窓をもつ二階建ての建物も見えます。丸みを帯びた屋根は唐破風で、二階の窓は禅宗寺院などによく見られる火灯窓(花頭窓)でしょう。

これらの殿舎の屋根は薄茶色に彩色されており、瓦葺きではなく柿葺き、または檜皮葺きであったと推測されます。柿葺きとは薄い板を重ね合わせて葺いた屋根、檜皮葺きとは文字どおり檜の樹皮で葺いた屋根です。

同じ寛永期の江戸の景観を描いた絵画史料に、「江戸図屏風」(国立歴史民俗博物館所蔵)があります。写真②に示したのは、その福井藩と加賀藩の上屋敷の部分です。最も絢爛豪華に見えるのは、將軍を迎えるために設けられた御成御殿の門(御成門)であり、屋敷の表門はそれとは別に建てられています。表門や屋敷の外周を囲む表長屋などは瓦葺きですが、御成門の屋根は赤茶色に描かれており、檜皮葺きを表しているものとみられます。屋敷内部の御殿群の屋根が薄茶色に塗られているのは、たぶん柿葺きなのでしょう。

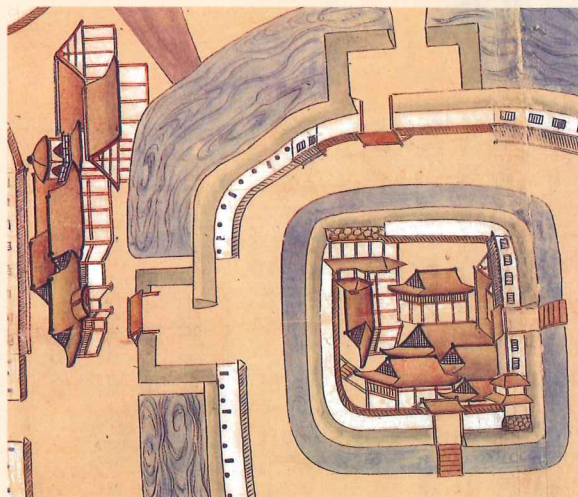
伝統的な殿舎建築では瓦葺きよりも柿葺き、柿葺きよりも檜皮葺きの方がより格式高い様式とされてきました。「駿州田中城図」に描かれた御殿群は、將軍を迎えるため最高の格式をもって建てられたものであり、おそらくは柿葺きか檜皮葺きだったと推測されます。

「江戸図屏風」の加賀藩屋敷には、田中城図の二の丸御殿にあるのと同く似た二階建て建物も描かれています。これは茶室とみられ、將軍御成の時などに茶事を行うことを想定して建てられていた可能性があります。田中城の二の丸御殿も、家光上洛時にそれと同じような使われ方をしたのではないのでしょうか。

田中城は家康の頃から、將軍や大御所が鷹狩りや上洛の途次に宿泊する特別な城と意識されていたものと思われます。「駿州田中城図」は、そのことを視覚的に実感できる貴重な歴史資料といえることができます。

(近世担当特別調査委員 宮崎勝美)

／前東京大学史料編纂所教授)



写真① 田中城の本丸御殿(右)と二の丸御殿(左)
「駿州田中城図」(藤枝市郷土博物館所蔵)より



写真② 江戸の福井藩屋敷(上)と加賀藩屋敷(下)
「江戸図屏風」左隻より(国立歴史民俗博物館所蔵)

瀬戸谷三題

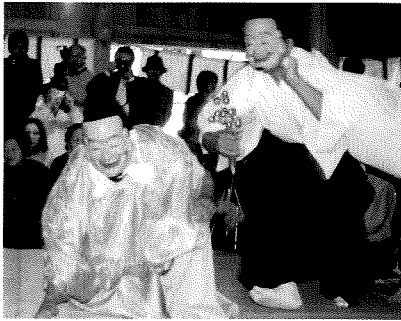
一、高根白山神社の祭礼

高根山は藤枝市の北部に位置し、標高八七一メートルで、市内で一番高い山です。その高根山の山腹に鎮座するのが高根白山神社です。

この神社の大祭日は十月二十九日です。祭りのメインは、県の無形民俗文化財に指定されている「高根白山神社古代神楽」です。お神楽は一二演目が奉納され、姫の舞・剣の舞・戎子大黒の舞等が参観者から評判です。

昔この祭りは近郷近在の中心行事で、麓の小・中学校は授業を二時間で打ち切り、みな揃って祭りに参加しました。麓の大杉の所には露天商が一〇軒以上立ち並び、とても賑やかでした。神社の近くまで行くと、お神楽の笛や太鼓の音が聞こえ、祭りの気分が盛り上がります。人垣を掻いぐぐり、必死でお神楽の舞を見ました。お神楽のお囃子を聞くと今でも舞の様子が目に浮かんできます。

家にはお客さんが大勢集まり、お餅やお寿司などのご馳走もたくさんありました。夜に校庭で映画会を催したこともあります。



戎子大黒の舞

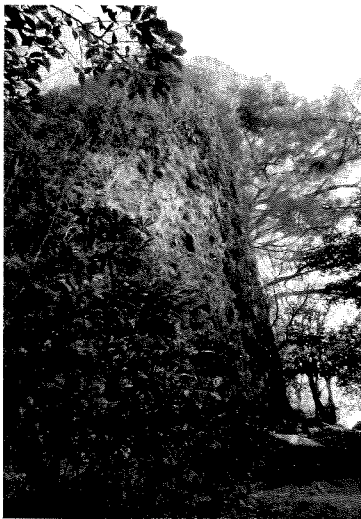
二、びく石岳

私の実家は市之瀬、びく石岳の麓です。朝起きて外に出るといつも目の前にびく石岳が見えます。びく石岳には、小・中学校の時の遠足などで何回となく登り、大きな石の上で遊びました。

びく石は標高五二六メートルの石谷山山頂付近にある巨石群の一つですが、この巨石群のある所を通称「びく石」とよんでいます。

びく石には、「びわ湖を掘った土で富士山を一晩で造れ」と神様に命じられた鬼が朝方うっかり眠ってしまい最後の一杯を慌てて運んだため、途中もつこから石ころを落としてしまった。その石ころがびく石だという伝説があります。

びく石は昔から地元の人に親しまれ、キャンプ場で賑わったこともあり、現在は市民の森として市民の憩いの場となっています。毎年三月の第三日曜日には地元の保勝会が中心となって「びく石山開き」が行われます。当日は神主の祝詞で山の安全を祈り、多くの人が手料理や地元郷土料理を肴に仲間と語り合い、楽しいひとときを過ごし、春を満喫しています。



びく石の巨岩

三、瀬戸の花火

「東西東西、第一四七号、八寸曲付、銀花びら入変化牡丹、当所、西野秋雄様の右はご献発よー。」櫓の上から特徴ある呼び声に続いてドン・ドン・ドンと太鼓の音、花火が打ち上げられ、ドーンと山にこだまする大きな音、色とりどりの大輪の花が夜空に広がります。これは本郷神社祭典の余興花火大会の一コマです。

『しずおかの文化』八九号・花火特集号に「百年の歴史をもつ藤枝市本郷神社の秋祭り奉納花火大会。地域住民の献発で、玉名・大さ・献発者名を一本ずつ櫓上で読み上げ、情緒ある花火大会。尺玉五本。」と書かれているように、歴史も古く、明治の頃には、集落間で競い合って手作り花火も打ち上げていたといいます。戦後も紺屋の人たちは自作の仕掛け花火で観客を楽しませていました。この瀬戸の花火は有名で、近在近郷の人たちの楽しみの一つでした。会場には露天商がたくさん並び、祭りの雰囲気を感じられます。会場周辺は見物客であふれ、十時過ぎまで花火を楽しめます。

(市史編さん調査協力員(瀬戸谷地区) 西野秋雄)



本郷神社の花火大会

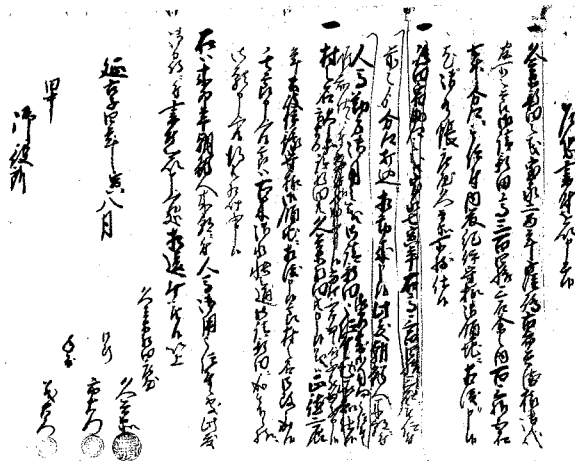
『久兵衛・市右衛門請新田村の近世文書』

の発刊について

藤枝古文書会では、平成二十二年夏に「久兵衛・市右衛門請新田村」の近世文書を解読した小冊子を発刊しました。これは、平成十九年度発刊の『大洲村の近世文書』に続く二冊目のものです。

その『久兵衛・市右衛門請新田村の近世文書』は、この土地の開拓をした田中本家と田中分家に保存・継承されていたぼう大な資料を、私たちが二年間にわたり翻訳・解読したもののなかから、重要と思われるものを選んで編集しました。

今の市内青南町の辺りはその昔大井川扇状地で、古来いく筋もの流れがあり、台風や大雨によって絶えず流れが変わり、その都度大きな被害に見舞わ



資料1 延享4年(1747)8月
久兵衛・市右衛門請新田由緒書

れてきた土地でした。しかし、徳川幕府の奨励策もあつて石高を増やすための新田開発が全国的に進められ、農地を増やし領主の財政基盤を拡大していくことが繁栄をもたらす基と考えられました。その開発の内容は、『藤枝市史』資料編3(近世二)に詳しく原文が掲載されています。

開発にあつた喜兵衛・五兵衛・善兵衛・久兵衛は、どういう素性の者だったのでしょうか。喜兵衛・五兵衛・善兵衛は江戸の町人だったのですが、久兵衛は当初、新田開発の請け人に加わっていた遠州北原川村(袋井市)庄屋の足立源五郎の三男で、父の名代として開発地に滞在し、指揮・監督にあたっていました。しかし、開発者がいづれも他国者であつたこともあり、村高に属さない「御免定高外」とはいえ、他国者の資本による新田開発に対して、近隣の村々が排他的な感情をもつのは当然でした。これに加えて、支配していた幕府代官の思惑などもあつて、いろいろと開発の妨害にあつたり占拠されたり、思うように開発が進まなかつたようです。その一例として、「田尻村・一色村・大島村・上小田村のうちへ、新百姓が家を建てると夜な夜な打ち壊しに來たり、作物は刈り捨てられ、また牛馬を放ち食わせた」などと具体的な妨害行為が書かれています。

また、開発途中においては、多くの出百姓を定住させるための保障や、開発責任者としての請負人への保障も行われました。出百姓が自分で開発した田畑の半分は出百姓の名義にするとか、また、青島

地域では年貢その他の諸経費を差し引いて田畑一反につき、一定の米を請負人に納めれば、田畑は出百姓の名義にするなど取り決められました。そのことにより、出百姓(近隣の村の二、三男)が定着していくことになりました。その様子が書かれた古文書が『藤枝市史』資料編3(近世二)にも掲載されており、例えば、弟を新田内に移住させるについて、

一、たしかな身元の者で、一切支障がないこと。
二、公儀のご法度に少しも背かせないこと。
三、宗旨はご法度の宗門(キリシタン)ではないこと。
四、年貢・諸役などの決まりには違反しないこと。
などを誓約する手形を、兄や開発請負人が提出しています。

最後に、正徳二年(一七一二)土岐伊予守頼稔が田中藩主になったとき、分郷された一三五石余の村名を「久兵衛・市右衛門請新田」としたことについて、従来どおり「御請新田」とよばせてほしいと願ひ出した文書が「資料1」です。自分たちの名前を村名にすることに戸惑い、遠慮があつたということでしょうか。(市史編さん調査協力員(藤枝地区) 八木 務)



青南町八幡宮境内にある
開発者・田中久兵衛の顕彰碑

菊川市沢水加の山田家と藤枝



現在も残っている山田家の長屋門（菊川市沢水加）

菊川市沢水加の山田成治家は、江戸時代初期に当地へ土着したという由緒を伝える旧家であり、現在もその長屋門に往時をしのぶことができま

す。さて、この山田家ですが、以下に記すように藤枝市史に若干のかかわりをもつと考えられるので、ここに紹介します。

まず、山田家先祖により安政年間（一八五四～六〇）に作成された「記録」には、寛永八年（一六三二）のこととして、「駿河大納言様御内山田三十郎様、当村山高式石壺斗御高入、御墨印御奥書判」の記事をみることができます。

次に、山田家の先祖たちが、明治二年から三年にかけて、静岡藩金谷原（牧ノ原）開墾方の強圧

から、寛永八年の証文を武器に、秣場（まぐさば）を守った経過をまとめた文書に「沢水加秣場の由来」がありますが、その冒頭は次のように記されています。

「寛永八年二月、駿河大納言の家臣、山田三十郎は田中城代たり、沢水加村山田治郎左衛門に好し、ために、山高二石一斗分を村有とし、以つて将来に伝えしむ」。

さらに、沢水加周辺（小笠郡河城村）について記した『河城村郷土誌』（大正末期刊）の山田治郎左衛門家に関する記載は以下のようなのです。

イ、祖先本国三河ノ人、豊臣秀次ニ殉ジテ紀州高野山ニ自害、文禄四年七月十六日。

ロ、山田三十郎源勝久駿河大納言忠長公隨身益頭郡田中在住、法号長寿院殿州山田久居士。

ハ、山田清太夫貞勝城飼郡に蟄居、沢水賀切開中、慶長元年申三月七日没、海泉宗源居士、宗源寺開基。

三つの資料には齟齬（そご）する部分もありますが、概略以下のように整理することができます。

一、三河を出自とする山田家の祖先が文禄四年（一五九五）に関白豊臣秀次事件に連座して高野山で自刃した。

二、その子三十郎勝久は、寛永の頃、駿河大納言徳川忠長の隨身として田中城にいたが忠長失脚事件に遭った。



遠藤家の墓所の一角にある伝徳川忠長の墓（藤枝市市之瀬）

三、その際、三十郎は、その子貞勝を領地の遠江国飼郡沢水加に土着させ、寛永八年二月二日付けの土地開発免許状を与えた。

四、その後、貞勝は沢水加の開発に努め、仏寺宗源寺（現在廃寺）の開基となった。

以上、山田家のルーツが駿河大納言忠長時代

から、寛永八年の証文を武器に、秣場（まぐさば）を守った経過をまとめた文書に「沢水加秣場の由来」がありますが、その冒頭は次のように記されています。

「寛永八年二月、駿河大納言の家臣、山田三十郎は田中城代たり、沢水加村山田治郎左衛門に好し、ために、山高二石一斗分を村有とし、以つて将来に伝えしむ」。

さらに、沢水加周辺（小笠郡河城村）について記した『河城村郷土誌』（大正末期刊）の山田治郎左衛門家に関する記載は以下のようなのです。

イ、祖先本国三河ノ人、豊臣秀次ニ殉ジテ紀州高野山ニ自害、文禄四年七月十六日。